

論壇：コアカリ『野生動物学』現行教育内容に関する検討事項

浅川満彦（酪農学園大学 獣医学群）

■ はじめに

本学会が創設された1995年当時には夢にも思わなかったが、今、獣医学の正規課程には野生動物学という科目がある。また、コアカリ指定齊一科目であるがゆえに共用試験でも出題され、その出来不出来が学生の進級要件となる。さらに、最近の獣医師国家試験には野生動物学を習熟していなければ解けないような問題を見かける。この科目を勤務先で担当している著者は、学生の将来に関わってしまうことから、緊張感が伴う一方で、コアカリ『野生動物学』の現行内容に関して若干の思うところもある。今後の参考として披瀝をしたい。

■ 目標と項目

著者勤務先では『野生動物医学』（獣医学類4年生後期・必須科目）という名称だが、この内容はコアカリ『野生動物学』の目標と内容に準拠した次の通りである：野生動物の生体機能のしくみを深く理解しながら、生態系のバランスを崩さぬように環境を健全な形で保全していく知恵や知識を学ぶ。遺伝子レベルから生態系レベルまで多種多様な観点から野生動物について学ぶ。この目標を完遂するため、この科目内には次の大項目（必修）が包含されている；生物多様性、（野生動物の）形態、生理、生態と生息環境、個体群動態、捕獲と不動物化、絶滅危惧種の保全、管理、動物園・水族館（園館）学、外来種、法制度と政策論（図1の斜体で記された語句。本文中では「」で示す）。これらに加え、アドバンスト（選択）として、（野生動物の）疾病とリハビリテーションも含む。

■ 旧野生動物学との比較

著者が本学でコアカリ『野生動物学』を担当することになった背景には、この原型になるような科目『野生動物学』（1996年度より開始、通年開講・選択科目）を講じていたことによる。しかし、こちらの方は、受講対象が1年生であったため、初学者でも理解可能な爬虫類・鳥類・哺乳類各群の分類・生態等を教えていた（注：後年、これらが動物愛護法の対象となったのは偶然である）。このような教授法を taxa by taxa 形式と称するが（後

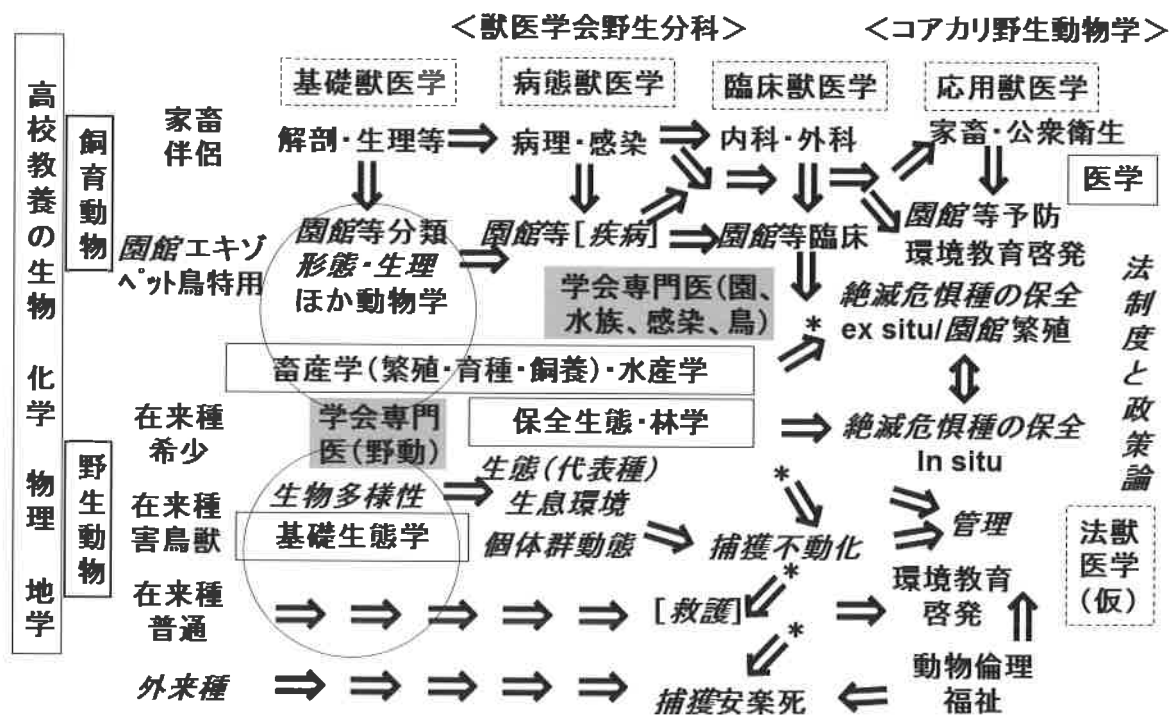
述も参照）、現行コアカリではこのような基礎的情報を教える機会はない。基礎的な個々の知識が欠如した状態で、学生はコアカリ『野生動物学』を理解出来ているのか不安である。それは、「生物多様性」や「外来種」について具体的イメージを抱いてもらうには、日本に生息する近縁な種や亜種などの基本的な分類群 taxon（この複数形が taxa）の情報が必須だからである。また、「生態と生息環境」、「個体群動態」、「絶滅危惧種の（生息地内 in situ）保全」および「管理」で標的となる在来種であるサル、クマ、イノシシ、カモシカ、シカなどに絞る、他について詳細を省いているのである。

それでも、taxa by taxa 式情報収集と記憶定着など自己責任で（英単語を覚えたように）自己学習せよ（大学生なのだから）という意見もあろう。実際、著者は1996年度開始の授業では、そのような方法で勤務先の脇にある森林に生息する野鳥を覚えたことがあった。相当大変だったし、顧問をしていた公認サークル野生動物生態研究会の学生に、実地で教えてもらったので不可能ではない。さらに、著者の勤務先では野生動物医学センター WAMC 主催の爬虫類・鳥類・哺乳類に関する分類・生態の講座を開講しているので（図1中央やや左、丸で囲んだ2か所）、必要ならばこれらを利用するだろう。

■ 「管理」について

しかし、そもそも従来の獣医学教育と馴染まないという点はより深刻な問題を孕む。それは「管理」（保護管理 [マネージメント]）である。この学問分野は保全生態学や林学（海棲動物なら水産学）で誕生・発展して来た学問で、今でも、そのような学問が責任担当分野である（図1中段やや下）。勤務先の大学では、環境共生学類という学科に優れた専門家が在籍している。そのような分野であっても、獣医師の資格や博士（獣医学）の学位を持った方々がプロとして活躍し、本学会員でも先導的な後進を育成している。その努力は筆舌に尽くせないものであったであろう。もちろん、保護管理のプロセスで、獣医学で扱う知識や技術が関わる。

しかし、「管理」が獣医学を構成する基礎・病態・臨床・応用には、直接、包含されない（図1上段、点線で囲まれた四角）。コアカリ『野生動物学』は応用獣医学のカテゴリーに配されるので（図



<>: 野生動物学の位置, 斜体: コアカリ大項目, []: 同アドバンスト, ○: WAMC ゼミによる taxa by taxa 形式による勉強会範囲, □: 近隣分野, ▨: 分野等, ■: 日本野生動物医学会認定専門医 5 分野 (動物園医, 水族医, 感染病理医, 鳥類医, 野生動物医)

図1 コアカリ『野生動物学』の内容と近隣分野・獣医学各分野などとの関連性

1 右上), 「管理」が公衆衛生学あるいは家畜衛生学などから派生した, あるいは同列になるとしたら, 多くの教員・学生は違和感を感じるであろう (注: しかし, 公衆衛生学の一分野であるコアカリ「環境衛生学」には衛生動物という小項目があり, 将来的には, この中に「管理」対象の鳥獣も包含される可能性は極めて高い)。当然, 「管理」は重要な施策であるので概要を知っておくことは, 獣医師となって農業や水産業分野の「管理」の専門家と仕事をする場合, 円滑で有効な協力体制の構築上, 有益であることは間違いない。

■ 保護と救護

もし, 今後も「管理」を獣医学徒に斉一的に教育するとしたら, 「リハビリテーション」(アドバンスト扱い) と対比しながら教えるのは如何であろうか。著者の経験上, 学生は「管理」に包含される<保護>と, 「リハビリテーション」を包含する<救護(活

動)>とが混同されている。同じ<護>が付いているのも混乱に拍車をかけるのだらう。新入生がよく口にする野生動物の保護は, ほぼ確実に<救護>である。おそらく, コアカリ「野生動物学」を受講する時点でも, この分野を志向しない(興味を示さない)学生のほぼ全てが同じ見方であろう。もし, こういった見方をするが学生が, 動物愛護行政・施策に関わることになったら, <保護・救護>の狭間で呻吟することにはならないか。したがって, 「管理」と「リハビリテーション」とを同等に扱い, しかし, それらの教育内容は詳細になり過ぎず, 概論的なもので十分である。この場合注意しなければならないのは, <救護(活動)>の限界や問題点等を明確に示し, 美談に終始しないことである。

■ 獣医学以外の分野との関連性

「絶滅危惧種の(生息地外 ex situ) 保全」の理解では, 畜産学(応用動物学) 分野の繁殖学や育種学等が基盤となる (図1 中段

あたり)。よって、学生さんには、本気でこの分野で研究をしたい、あるいは職を得たいならば、taxa by taxa 式自己学習に加え基礎生態学や当該の農学分野の独習を推奨している。

■ 他科目と馴染む項目

この他の大項目である「形態」、「生理」、「捕獲と不動化」、「園館学」、「疾病」および「リハビリテーション」は基礎・病態・臨床各獣医学の内容の延長線上に位置付けることが出来る(図1上および下段)。それでも、前述の taxa by taxa による知識があれば、より効果的な理解が期待される。

これらのうち、「疾病」と「リハビリテーション」は、現状ではアドバンスト扱いなので(前述)共用試験には問われない。そうすると、授業で扱わない場合もあるし、授業を実施したとしても学生側は、それなりの受講姿勢となる。日本獣医学会における野生動物学分会のカテゴリーは病態獣医学となっている(図1最上段中央)。個人的な話で恐縮だが、著者の専門は寄生虫(病)学で、勤務先の大講座(分野)が感染・病理学なので病態扱いにして頂くと、授業担当の根拠のような背景が得られる。いずれにせよ、病態獣医学や感染・病理学の根幹をなす「疾病」がアドバンストというのも如何なものか。実際、本学会大会でエントリーされる多くの演題が病態分野を占めている。本学会の認定専門医の分野(図1中央あたりの灰色四角)も念頭に置きつつ、「疾病」と「リハビリテーション」の重みについて再検討を願いたい。この際、学生に強調して頂きたいのは、家畜・伴侶以外の臨床分野では鳥類臨床研究会や日本獣医エキゾチック動物学会(旧エキゾチックペット研究会)が機能しており、学生会員も受け入れていることである。そして、「リハビリテーション」でしっかりした臨床技術を学ぶためには、こういった研究会・学会に入会しておくことが肝要であるという点である。

■ 重複項目と事前学習

以上の他、単純な問題点として、「生態と生息環境」、「個体群

動態」、「生物多様性」、「外来種」、「絶滅危惧種の(生息地外 ex situ) 保全」および「法制度と政策論」を中心に重複している中小項目が複数あり、整理の必要性を感じた。本学の場合、90分×15コマ内で授業を完結させないとならないので、無駄の排除は切実なのである。加えて、これら大項目群の円滑な理解に関し、教養・基礎の段階で生態学を教えていない本学のような大学では、事前に高等学校レベルの生物や地学で扱う生態・行動・社会・系統分類・進化・生物地理などの復習(事前学習)を(この科目の授業目標などに判りやすく示し)強く推奨した方が望ましいであろう(図1左端)。

■ まとめ

以上のように、コアカリ『野生動物学』は応用獣医学の科目群に包含されるが、他の科目とは異なり、基礎・病態・臨床獣医学を習熟していても、理解に限界が生ずる点で特殊である。しかし、「園館学」、「外来種」、「希少種保全」、「リハビリテーション」および「疾病」、さらに、コアカリには含まれないが法獣医学的な項目(図1右下、点線囲み部分)などは既存の獣医学教育と親和性があるが、ある程度の準備(高校生物レベルの生態・進化の復習や taxa by taxa 形式の独習等)が必要である。

コアカリ『野生動物学』で扱う項目の多くは、著者が学んだ英国の専門職大学院野生動物医学修士(MSc Wild Animal Health)課程でも扱ったものであり(Sainsbury et al, 2000)、EAEVEなどの国際認証にも通じる教育内容であろう。今後も問題点を改善し、世界に誇れる内容にして欲しい。

■ 引用文献

Sainsbury, A., Fox, M.T., 大平久子, 河津理子, 浅川満彦, 2001. 英国王立獣医学校およびロンドン動物園による野生動物医学コースの概要と参加者の印象について. 獣医畜産新報, 54: 801-812.